

ハクビシンの生態解明と被害対策技術の開発

農林総合研究センター（茶業特産研究所）

キーワード：農業全般、野生動物、外来種、被害防止技術

1 技術の特徴

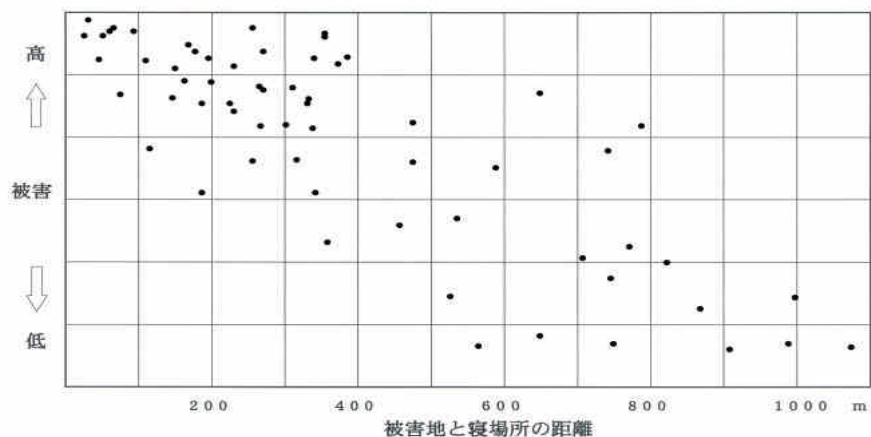
近年、ハクビシンによる農作物被害地域が急速に拡大し被害作物も多様化している。ハクビシンは優れた運動能力を持ち、夜間に活動することからひと目に触れることが少なく、効率的な被害対策は難しいとされてきた。中山間営農担当では、発信器を利用した調査や飼育個体の行動調査を実施し、生活の実態を明らかにするとともに被害と寝場所には密接な関係があることを解明した。この結果をもとに寝場所の撤去と先に開発した直管パイプと防風ネットを組み合わせた電気柵「白落くん」を組み合わせた対策が最も有効であることを明らかにした。

2 技術内容

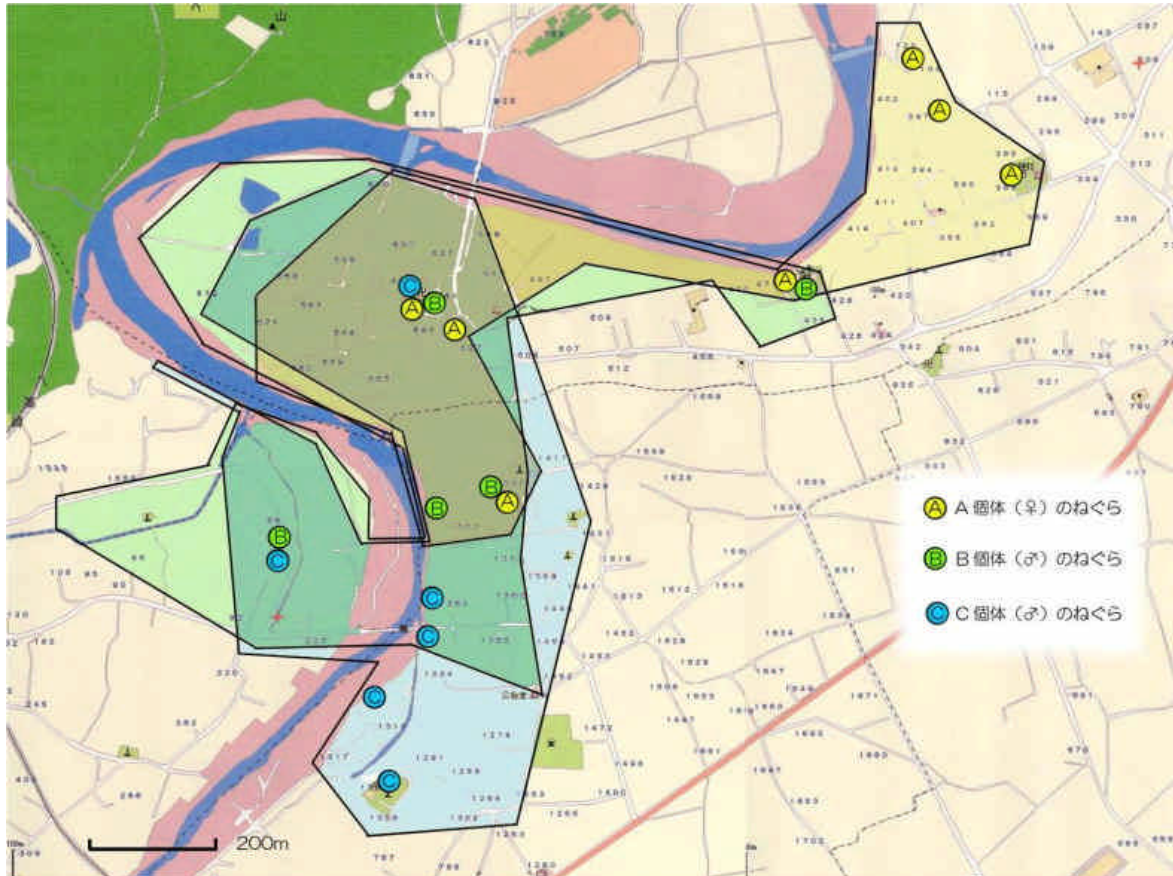
- (1) ハクビシンの行動域にはナワバリはなく、エサ場、寝場所は共有するため、生活環境が良ければ複数頭が同じ場所で生活できる。
- (2) 行動域は冬期には狭くなり、集落に依存した生活になる。これは、畑にエサがなくなることにより、集落内の生ゴミなどを利用するためである。ゴミをなくすことも有効な対策である。
- (3) ハクビシンは行動域内に複数の寝場所を持っている。寝場所・エサ場との関係が強く、常にエサ場に近い所を利用する。また、エサがあり続ける場合は同じ場所を続けて使うなどの結果もあり、寝場所が被害発生の基になっている。
- (4) 被害が多発する地域で寝場所の撤去を行ったところ、被害は著しく軽減した。

3 具体的データ

- (1) 被害発生と寝場所の距離



(2) 発信器装着個体の行動域と寝場所



4 適用地域

ハクビシンによる農作物被害発生農家。

5 普及指導上の留意点

- (1) ハクビシンの被害が多発する地域では近くに寝場所があると考えるが良いが、河川や水路が多い地域ではそれらを利用して遠方からくる場合がある。
- (2) ハクビシンに侵入されやすい家屋は、1頭追い出しても複数の個体に侵入されることが多いので、侵入口を探し出してしっかりとふさぐことが必要である。
- (3) 家庭の生ゴミや収穫残、庭先の果樹などがエサとなっている場合があるので、放置しないようにしっかりと管理する。

6 試験課題名(試験期間)、担当

ハクビシンの生態解明と被害防止技術の開発(2006～2008年度)、中山間営農担当
外来動物の生態把握(2006～2008年度)、中山間営農担当
野生動物の農作物被害防止総合対策の推進(2009～2011年度)、中山間営農担当
鳥獣被害防止対策推進事業(2009～2010年度)、中山間営農担当